

裏切られた肉体——T. E. ロレンス論(1)

浅井 雅志

序

T.E.ロレンスという存在は、おそらく今世紀でも稀に見るほどに複雑で不可解な「現象」であろう。まただからこそ、1軍人としてはまったく例外的な注目を浴び続けているのだろう。彼に関する本や論文はおびただしく、それぞれに有益な光を投げかけてはいるが、彼という存在のはらむ謎はおそらくは永久に残るであろう。それは必ずしも彼が例外的な存在であったからではなく、むしろその謎が人間存在そのものが潜めもっている謎をあまりに鮮明に示しているからである。

本稿の目的は、ロレンスの中に潜む謎を解明しつつ、それを通して人間という謎めいた現象の一側面に触れ、それを明らかにすることにある。以下、この第1部では、まずロレンスの身体観と、それと密接にからみあっている性に対する態度を考察したい。彼の身体的行動にはとりわけ多くの謎と伝説がまわりついている。性衝動にまったく悩まされなかった、女性を嫌っていた、同性愛者であった、マゾヒストで、後年はある青年に自分の身体を鞭打たせていた、等々……こうした「伝説」にどれだけの信憑性があるのかは、それだけできわめて興味をそそられる問題だが、ここで考えたいのは、むしろそうした「伝説」を生みだした土壌、そしてそれが生まれるにいたった経緯である。この論は、ロレンスを病理学的に解剖し、すべてをある特定の原因に帰して、彼を還元論的に裁断することを意図したものではない。しかし彼の著作や行動は、曖昧な、あるいは未知の部分があまりに多く、自己神秘化をはかったのではないかという見方もうなずけないわけではない。¹⁾ それゆえ、彼の著作や手紙などを読むときには、ある種の心理的読み解きが要求される。ある程度の精神分析的手法、たとえば彼の出生、幼児期、母親との関係などに触れる必要性はそこから生じる。それらが彼の後の考えや言動のすべてを説明するわけではないが、こうした要因を抜きにしてそれらを語るができないのも確かである。

次に、稿を改めて、彼の国家観を見るつもりである。「アラビアのロレンス」として華やかな脚光を浴びた彼ではあるが、客観的にはあくまで大英帝国の軍人であり、諜報部員であった。ここでも彼のとった行動は謎に満ちていて、ある人から見ればおぞましい国家主義者、人種差別主義者であり、またある人から見れば、アラブを愛し、彼らの解放を心から願って自らの命まで差しだした反帝国主義者になる。同時に、有名人になった後で彼が取ったきわめて奇妙な行動を検討したい。その名声はもとより、終戦時には大佐にまで昇進していたその地位も、学者、あるいは政府要人としての洋々たる前途もすべて振り捨て、偽名を使って1志願兵として空軍に入隊したこと、今では英文学史に確固たる地位をしめる大作『叡智の七柱』執筆と、それに対するアンビヴァレントな態度を初めとして、

彼の生涯を貫いて見られる、通常の基準では計れない行動を考察し、それが人間という現象の解明にいかなる寄与をするかを見てみよう。

1. 暗き森を逃れて

ロレンスの身体観を考察するには、彼の出生、および幼児期から青年期にかけての経歴を見ることが不可欠である。これはおそらくいかなる個人にもあてはまるであろうが、ロレンスの場合、その特殊な出生ゆえにとりわけ重要となる。

トマス・エドワード・ロレンスは1888年8月16日、北ウェールズの小さな町、トレマドックで生まれた——と書くと、きわめて平凡な出生に聞こえるが、そこにいたる経緯は実に複雑である。まず第1に絶対に確実とされる説がない。現在多くの伝記や批評書で「定説」として扱われているのは、大略以下の通りである。父はトマス・ロバート・ロレンス、母はセアラ・ロレンスといったが、2人は結婚しておらず、また終生結婚することはなかった。父は以前はトマス・ロバート・タイ・チャプマンといい、アイルランドのウェストミース州に地所をもつアングロ・アイリッシュの准男爵で、妻イーデイスとの間に娘4人をもうけていた。その彼が、娘たちの家庭教師にやとったセアラ・メイドゥンと恋に落ち、ついには駆け落ちをしたのである。

さらにやっかいなことに、セアラの家系もはっきりしない。スコットランドの貧しい境遇の出身であることは確かなようだが、姓もメイドゥンではなくジャーナという説もあり、今では私生児であったというのが定説になっている。

駆け落ちした2人は各地を転々とし、その間に5人の男児が生まれた。ダブリンで長男のロバートが生まれるとまもなくイングランドに移り、ここで正式に姓をロレンスと変える。ウェールズでトマス・エドワードが生まれてわずか1年あまりで一家4人はスコットランドに移り、そこで3男ウィリアムが生まれる。マン島、ジャージー島と転居を重ねた一家は、やがて北フランスのディナールに住み、ここで4男のフランクが生まれる。1894年には英国に帰り、ハンプシャーに2年ばかり住んだ後、両親は子供の教育を考えて、1896年オクスフォードに移り住む。ここがトマス・エドワード（以下、断りのないかぎりロレンスと呼ぶ）の「故郷」となる。この年から1907年まで彼はオクスフォード・シティ・ハイスクールに通い、1907年から1910年までオクスフォード大学ジーザス・カレッジで学ぶことになる。その後もアラビアから帰ってくるのはこの地であり、彼自身オクスフォード人を自認していたようである。

ここまで見てきただけでも、彼の出生および幼児期の体験の特殊性は一目瞭然であろう。こうした体験が1人の人間の性格および後の思想と行動に影響を与えないはずはないが、その中でももっとも目を引くのは、彼が、私生児である女性と駆け落ちした貴族との間に生まれた私生児であり、しかも父の前妻が頑として離婚を受け入れなかったために、彼が終生私生児でありつづけたという点である。幼い頃から聡明かつ繊細であった彼にとって、この事実がいかなる打撃となったかは想像にかたくない。

ロレンスの死後、末の弟のアーノルド・ウォルターが編纂した『友人から見たT.E.ロレンス』に

見られる回想を見ると、ロレンスが早くも幼児期から青年期にかけて、後年アラブで見せる才気と落ちつきを備えていたことがうかがわれる。1例として、当時オクスフォード・ハイスクールの副校長であったアーネスト・コックスの言葉を引いてみよう。

ネッド³⁾は言葉少なで冷静沈着、果敢だがどこもなく謎めいたところのある子だった。他の少年たちに比べて特別目立っていたわけではないが、ただ、われわれの思いも及ばぬところにか可能性を秘めているのではないかと思わせる点だけが違っていた。頭脳は明晰で、ものに動じることはあまりなかった。自負心が強く、やる気のおこらぬことを無理にさせられると本能的に内に閉じ込めってしまうのを誰もが感じた。肉体は頑健ではなく、将来あんな肉体的耐久力を発揮するとは思えなかった。しかしその敏速な歩きぶりは、精神と肉体の敏活さを物語っていた。それと同時に、話し相手に対して心持ち頭をうつむけ、上目づかいに相手を見つめるときの不屈の眼差しは、彼が何か物事に当たるときの深みと真剣さを表していた。⁴⁾

オクスフォード時代の親友で、互いに同性愛的親近感を抱いていたといわれるヴィヴィアン・リチャーズが、ロレンスの死後まもなく出版した回想録にはこうある。「リーダーたる者、機略、すばやい本能的ひらめき、その国や人々についての詳細な記憶、そして不屈の意志をもっていないはならない。これらすべての点において、ロレンスは至高の能力を備えていた。」⁵⁾特に初期の回想録には、こうしたいさか過度に思える賛美の言葉が続くので、眉に唾をつけたくなるのも無理はない。これほど有名になった人物の汚点は書きにくいということはあるだろうが、しかし彼が成人した後に知り合った、アラブ人その他の非英国人も含む多くの人の証言と照らし合わせるとき、こうした言葉が死者に対する単なるはなむけの言葉ではないことがわかる。彼らは、彼に批判的な人も含めて、その勇氣と果敢さ、頭脳の明晰さには一様に賛嘆の言葉を述べている。

オクスフォード大学では奨学金を得て現代史を専攻する。少年の頃から彼は、オクスフォードの町の工事現場から出てくる陶器の破片などの遺物に強い興味を抱き、現場の労働者に金を渡してそれらをとっておかせ、自分でそれらを復元していた。こうした考古学への興味、さらに後には中世に対するロマンティックな関心を抱くようになるが、この傾向はさらに強まり、1908年の夏には自転車ですフランス各地にある中世の城を見て回る。翌1909年の夏には多くの人の反対を押し切ってシリア(いわゆる大シリア、戦後分割される以前のシリアで、現在のイスラエル、ヨルダン、レバノンを含む)に渡り、数カ月にわたって酷暑の中を旅し、多くの十字軍の城を見て歩いた。しかも1600キロにわたる旅程の大半を徒歩で踏破したのである。この現地調査をもとに書き上げた卒業論文、「十字軍の城」は従来の定説をくつがえす画期的なものであった。すなわち、それまでは中世ヨーロッパの築城術は、十字軍がもたらしたアラブの築城術から学んだものであるとされていたのを、ロレンスは逆に、ヨーロッパの築城術こそアラブのそれに影響を与えたことを、多くの事例を引いて実証したのである。1卒論が学界の定説をくつがえし、しかも多くの権威者の賛同を得ること自体きわめて珍しいことだが、このロレンスの説が現在に至るまで定説として支持されていることを知ってわれわれの驚きは深まる。この卒論により、彼は第1級優等賞を得て卒業する。

歴史家としてのロレンスの前途は洋々としているかに見えた。陶器集めをする頃から彼に目をかけていた一人の人物がいたが、この人物こそ後のロレンスに甚大な影響を与えたD. G. ホガースである。彼は考古学者、東洋学者で、当時オクスフォードのアシュモリアン博物館の館長を務めていたが、後のロレンスは彼をこう回想している。「17歳以来、私が享受したすべてのことは、彼という人物のおかげである。……彼は大樹のようであり、私の人生の背後にあるものの主要部分をなしている。彼が倒れるまで、どんなに私を庇護するために尽くしてくれたか分からなかった。」⁶⁾ ロレンスが人生の大恩人と讃えるホガースは、しかし彼を学者の世界には導かなかった。いや、表面上はそう見えなくもない。つまり彼は、当時大英博物館の依頼で監督をしていた小アジアのカルケミッシュでの考古学的発掘にロレンスを参加させたのである。しかしこれが、ロレンスの学者としての経歴を援助するためのものだったかどうか、あるいはそれだけを目的としたものであったかどうかは大いに疑問視されている。現在では、その国家主義的思想、当時の大英帝国の主要な人物との私的な関係、さらには、第一次大戦中に設立され、のちにはロレンスも属することになる諜報機関「アラブ情報局」の顧問としての地位などから、彼が早くしてロレンスの能力を見抜き、彼自身の目的に資するロレンスの「実用性」に着目してこれほど愛顧したのではないかと考える評者が多い。

そしてロレンスの人生は、まさにホガースが望んだであろう航路を取ることになる。1914年の第一次世界大戦勃発とともに、アラビア語の卓越した能力、アラブの地理や歴史、民衆についての知識をかれ、そしてもちろんホガースの推薦を受けて、ロレンスはカイロの「アラブ情報局」に勤務する。1916年6月10日、メッカの太守で、ヘジャズ（サウディアラビアの紅海沿岸地域）の最有力者であるフセインは、4世紀にわたって中近東を支配してきたオスマン・トルコ帝国に対して反乱ののろしを上げる。多くの帝国の例にもれずオスマン帝国も多民族国家であったが、異民族に対して抑圧的ではなく、逆に多民族融和策をとっていた。そのため、支配者たるトルコ民族よりも大きな集団であったアラブ民族⁷⁾もとりわけ虐げられていたわけではなく、政府の高官になっている者も多数いた。それが反乱に立ち上がったのは、ひとえに帝国の崩壊を食い止めようとする最後の皇帝、アブドゥル・ハミドと、その取りまきの必死のあがきのためであった。彼らはそれまでの民族融和策を放棄し、少数民族の抑圧に乗りだした。史上悪名高いアルメニア人の大虐殺が起こったのはこのときである。彼ら以外にも、ギリシア正教徒を含む多くのキリスト教徒が殺害された。同じムスリムとはいえ、こうした事態に危機感をつのらせたアラブ人は、徐々に民族主義に傾いていった。1915年、アラブの民族主義者たちの反乱の策謀が発覚し、その中に政府の要職についている者もいることに衝撃を受けたオスマン帝国の高官たちは、彼らに極刑を課した。ここにアラブ人の蜂起の期は熟した。

現在サウディアラビアと呼ばれている広大な地域は、当時は多くの部族に分裂し、互いに対立し合っていた。その中でももっとも大きな信望を集めていたのがヘジャズのフセインであった。彼に反乱のリーダーシップを求める声があがったのは当然であった。しかしここでやっかいなのは、この反乱が単に抑圧者対被抑圧者の間の闘いではないという点である。つまりこの地は、主として石油の利権を求めるヨーロッパ諸列強の角逐の場になっており、オスマン帝国をドイツが、アラブを主に英仏が支援していたのである。

かくしてフセインはアラブの反乱に立ち上がったが、ドイツの支援を受けているオスマン帝国に対して自力で勝利をおさめる可能性はどう見てもなかった。しかし自国の権益にとってオスマン帝国の崩壊が最重要事であった英仏は、裏でアラブを支援しようとした。フセインと接触する任務を負った英国情報部東洋班長のロナルド・ストーズはヘジャズのジッダに派遣されたが、これにロレンスが同行することになった。2人はフセインに会い、英国の支援を約束する。そしてこのときからロレンスはアラブの反乱に本格的に関わることになる。

アラブ反乱とその直後の経緯は次稿の主題と密接に関わるので、そちらに譲ることにする。本稿の主題に関しては以下の概略で十分であろう。

アラブ反乱の勝利、そして第1次大戦の勝利は、ロレンスを一挙に英雄にする。パリ講和会議にも出席し、アラブのために奮闘するが、列強のエゴに空しく押し切られてアラブは寸断され、反乱中に彼らにしていた約束、すなわち統一アラブの宿願は夢と消え、結果的に彼はアラブを裏切ることになる。しばらくオクスフォードのオール・ソウルズ・カレッジのフェローとなり、オクスフォードとロンドンを行き来しながら、累世の大作『叡智の七柱』を3回書き直して完成させる。その後、戦後処理をまかされて植民地相に任命されたウィンストン・チャーチルに請われて彼のアドヴァイザーになるが、1年ばかりでこの職を辞し、オクスフォード大学のフェローという特権の地位も放棄した彼は、ジョン・ヒューム・ロスの偽名で一志願兵として英国空軍に入隊する。しかし彼の名声は衰えることなく、半年たらずで新聞に素性をすっぱぬかれ、除隊せざるをえなくなる。数カ月後、再び名前をT. E. ショーと偽り（後には正式に改名する）、今度は英国陸軍の戦車部隊に入隊する。2年後には再び空軍にもどり、2年間のインド勤務を含め、1935年まで英国各地を転々とする。その年の3月に除隊、ドーセット州クラウス・ヒルの家に引退してまもない5月、かねてから熱愛していたモーターバイクで事故を起こし、約1週間後、かつて勤務していたボヴァイントンの陸軍病院で死去する。46歳であった。

2. 「内なる内戦」

ある人間の身体観を知るには、その人間が性についていかなる態度をとっているかを見るのが一番確実である。いや、身体をどう見るかは、性をどう見るかとほとんど同義でさえある。「序」にも書いたように、ロレンスのセクシュアリティについては多くの言葉が費やされてきた。しかしまず彼自身の言葉を聞くのが順序だろう。

……しかし、われわれ人間など、死ぬか、あるいは精神がなくなった方が、世界ははるかにきれいな場所になるのではなからうか？ われわれはみんな罪人なのだ。こうした肉欲がなければ、君もぼくも存在していないのだ。肉をそなえたすべてのものは、……淫らな思いが行動に移され、それが成就した結果なのだ。そしてこの誕生という罪のいかにばかりかは、生まれた子供にもとどまるのではなからうか？……いずれにせよ、すべて汚らわしいことだ……⁸⁾

ここにいる男たち⁹⁾は、口汚いが、その裏には精神の動物性とでもいべきものが浸透している。

彼らの混じりけのない動物性に触れると、ぼくは恐怖を感じる、いや、痛みさえ感じる。女性の肉体を買ったり、自分の身体を売ったり、その他いかなるやり方にせよ自分を汚すことは、ここではなんの批判も受けないどころか、自然なことと考えられている。ぼくはこうしたことに対して叫び声を上げた。ひとつには自己憐憫の情から、というのも、ぼくは自分が彼らと同じような人間になったことを呪ってきたからだ。またひとつには、そんなことをしても失敗するという予感がしていたからだ。なぜかという、ぼくのマゾヒズムはずっと道徳的であったし、これからもそうであるだろうからだ。ぼくは肉体的にこうしたことをすることはできない。実際、ぼくは彼らが肉欲にふけることから得る満足を、それを拒否することから手に入れるのだ。……肉体にまつわるものすべては、今のぼくには嫌悪すべきものなんだ（ぼくの場合、嫌悪すべきというのは不可能と同じ意味だ）。¹⁰⁾

なぜ世の父親や母親は、子供をこの悲惨な世界に生み出す前に少し考えないのでしょうか。こんな世界を生き抜こうとする奴なんて、怪物だけです。両性が融合する理由の99パーセントは性的快楽、残りのほんの1パーセントが子供がほしいという気持ち、少なくとも男性に関してはそうだと聞いたことがあります。前にも言ったように、私はそうした感情に押し流されたことは1度としてありません……おそらく、子供がもてるという希望だけが、もしそれがなければ女性にとって耐えがたい屈辱であるにちがいない行為を、多少とも緩和しているのでしょう——いや、私にはそれが耐えがたいものだと感じられるのです。……私はこうした動物的側面を蛇蠍のごとく嫌っています……私はこの世に生み出されたことを残念に思います。この世を去るときには、さぞや嬉しいでしょう。¹¹⁾

君の最後のページの性交についてのくだり、あれにはまったくまいった。前にも書いたが……ぼくはやったことがない。あまりしたいとも思わない。……人が話しているところによると、あっというまに終わるそうだ。……だから人生の果実を食べないままにいるといった気はしない。それに、その後には汚らしい感情が残るにちがいないからね。¹²⁾

これらの文章で目を引くのは性に対する強烈な嫌悪感だが、とりわけ特徴的なのは、その嫌悪が、子供をこの忌まわしい世界に生み出すことに対する嫌悪と分かちがたく結びついていることである。すなわち、性はそれ自体汚らわしいものであると同時に、その生殖機能ゆえに忌避されているのである。そしてその根底には、子供が生み出される世界に対する深い絶望が見て取れる。人は容易にこれをロレンスが私生児であることと結び付けるであろう。そしてそれはむろんまちがいはない。しかしことはそう簡単ではなさそうだ。

ロレンスの不可思議な一生を見ると、こうした性に対する見方、そして身体観がそれになんらかの影響を与えたと考えるのはきわめて自然であろう。さらに、こうした思考法の形成にあたっては、人生の初期における心理的トラウマが決定的役割を演じたことには疑問の余地がない。フロイトは人間の性格形成にあたっての幼児期の体験の重要性を生涯説き続けた。彼の思想は独創的な洞

察に満ちていて、まことに予言者と呼ぶにふさわしいが、人間のあらゆる精神病を、出生時および幼児期のトラウマの体験に帰せしめる手法は、あまりに還元的であるという感を免れない。現在見られるフロイト批判の一端はこれに起因していると思われ、その意味では正当な批判であるが、しかしだからといって、フロイトの個々の洞察がその批判に連動して機械的に否定されるべきではあるまい。必要なのは、そのトラウマを探り当て、それが人間の謎にいかなる照明を投げかけるかを検証しつつ、しかしそれでもってある人間のすべてを説明し去ることはひかえるという、いわばバランス感覚であろう。この還元論の誘惑を退けることができれば、精神分析的アプローチはかなりの有効性をもつだろう。

彼の母親、セアラ・ロレンスの回想記が残っている。彼女の目からみたロレンスは、「いつときもじっとしていない」¹³⁾子であった。同じ回想によれば、彼は、俗説とは違って学校と勉強が好きで、またよくできた。ここに記されている重要な事件は、学校である年下の子がいじめられているのを助けようとした彼は喧嘩に巻き込まれ、足首近くの骨を折ったことである。¹⁴⁾母はこれが彼の成長を止めた原因であると思っていた。彼の身長は160センチ強で、極端に小さくはなかったが、英国人の中では低い方だった。成人した彼の写真を見ると、身長に比べて頭が不釣り合いに大きいので、あの事件が自然な成長を妨げたという見方は正しいのかもしれない。これが彼の精神にいかなる影響を及ぼしたかは推測の域を出ないが、彼の後の不可思議な心理と行動の原因のひとつをここに見ようとする者もいる。

彼は「やることすべてに非常な情熱を傾けた。」¹⁵⁾彼がとりわけ関心をもったのは、読書、陶器などの古代の遺物の収集と復元、自転車旅行（英国と北フランスのかなりの部分を走破している）、川下りなどの冒険、書物の美しい装丁などであった。と同時に彼は、興味を引かないことには、周りの人間が、また社会がいかに熱狂していても、一顧だに与えなかったという。たとえばフットボールをはじめとするスポーツや、青春期には多くの者が1度ならずやるいたずらやどんちゃん騒ぎにはいっさい関わらなかった。¹⁶⁾

多少奇矯ではあるが、しかしこの頃のロレンスは後の彼を想像させるような突出した存在ではなかった。しかしその素地は着々と形成されつつあった。彼ら兄弟は、熱心なクリスチャンである両親につれられてセント・オールディツ教会に通い、何年にもわたってクリストファー牧師の教えを熱心に受けた。クリストファーは後にある程度の名をはせる熱烈な福音主義者¹⁷⁾で、彼の教えが自分の「罪」の自覚にさいなまれていたロレンスの母に大きな影響を与え、そして救いとなったであろうことは容易に想像できる。現に5人の息子のうち3人、すなわち長男のロバート、3男のウィリアム、4男のフランク（この2人は第1次大戦で戦死する）はクリストファーと母の感化を強烈に受け、とりわけロバートは後に宣教師となって1921年から中国に渡り、1年後には母もこれに合流するのである。

弟のアーノルドは、ロレンスがこうした環境と教えから相当な影響を受けたと見ている。いずれにせよ、彼がきわめて宗教的、ほとんど清教徒的雰囲気の中で育ったことは確認しておかねばなるまい。この雰囲気を、彼の伝記作者のひとり、ロレンス・ジェイムズはこう描写している。

毎日家族全員で祈りが捧げられ、注釈付きの聖書が頻繁に読まれた。悪徳に転げ落ちる道はロレンス夫人の厳しい監視の目であつちりと遮断され、飲酒や、シェイクスピア以外の芝居、ダンスはすべて禁じられていた。恋愛などもつてのほかで、女性はいっさい近づけられなかった……¹⁸⁾

ロレンス伝説の中での彼の父は、酒の好きな道楽者として描かれることが多いが、これもアーノルドによれば、母は「ファンダメンタリスト¹⁹⁾」的しつけのおかげで宗教的になったのであって、もともとの性格ゆえではない。……父の方がより宗教的性向をもっていた。²⁰⁾ 父親の「感情的な、ほとんど神秘的ともいえる宗教心²¹⁾」によって生まれたなら、ロレンスの屈折もあるいは軽減されたかもしれない。しかし育児としつけは母が一手に引き受けた。その権威に反抗すると、「彼らはむき出しの尻を鞭打たれた。」²²⁾

こうした教育は、とりわけ意志と自我が強かったロレンスにとって次第に抑圧と感じられるようになり、ついに17歳のとき家出をする。オクスフォードから数百キロ離れたコーンウォールまで行くが、頼るあてもなく、せっぱつまってファルマスの英国砲兵守備隊に志願入隊する。結局はそこでの同僚の乱暴さにへきえきして父に助けを求め、家に帰る。²³⁾

強烈な、それもドグマティックな宗教心に支えられた支配的な母親と、早くから強い自我を示した子供の間に見られる、これは典型的な葛藤といえようが、それが子供の心理に残した傷跡はきわめて大きかった。後年、その傷を癒すかのように、彼はG. B. ショー夫人のシャーロットに、ほとんど代理母にすぎりつくかのように親密な愛情を示し、また求めた。おそらく生前に彼がもっとも心を開いた人間のひとりであった彼女に、彼はほかでは見られない率直さで母のことをこう語っている。長い引用だが、彼と母親との関係を知る上で決定的な重要性をもっている。

彼女はあまりに硬直しています。自分に万全の自信があるのです。彼女の「硬直」は何年も前に、おそらく私が生まれる前に始まったものです。私は彼女に私の感情を、信じていることを、生き方を、知られることを極度に恐れています。もし知られてしまえば、それらは傷つき、台無しにされ、もはや私のものではなくなってしまうのです。……彼女はわれわれ兄弟が成長するのを見ようとしません。それは思うに、われわれが成長をはじめて以来、彼女自身成長を止めてしまったからなのです。彼女は私の父にすっぽりと包まれています、その父は、彼女があらゆる困難と闘って彼の以前の国と生活から用心深く引き離し、勝ち取ったもので、自らの力の記念碑として飾っているのです。彼女は狂心的な主婦でもあり、自分のことなどまったくかまわないほど家事に打ち込むのです。

……手紙ではいつも自分が年老いてさみしいともらします。そしてわれわれだけを愛しており、同じようにわれわれも彼女を愛することを請い願うのです。いつもわれわれをキリストの方に向かせ、そこにしか幸福と真理はないと言うのです。自分自身はちっとも幸せになんかになっていないのに。

あなたにこんなことを言うべきでないのは分かっています。でも彼女は私とアーニーをおそろしいほど不幸にしました。われわれにはどうしようもありません。母があんな不可能な要求を

突きつけることでわれわれに与えた痛みを、ほかの人間には決して与えまいと思うばかりです。しかし実は今でもわれわれは彼女に痛みを与えています。彼女からいくら手紙で要求されても、水道の蛇口をひねるように愛情を注ぐことなどできないからです。われわれにとってキリストはシンボルではありません。彼女のような信仰者をもつことですっかり汚されたひとつの人格なのです。……彼女が安心してわれわれを放っておいてくれさえしたら。

私の父は人柄の大きな人間で、いろいろな経験をつんでいて、寛容で、懐が深く、そそっかしくてユーモアたっぷり、話がうまく、生まれながらに貴族的でした。……母の方は、スカイ島の信仰心の篤いプレスビテリアンの家で罪の子として育てられ、子守になり、それから私の父をその妻から奪うという「罪」（彼女自身の判断です）を犯しました……私の両親は常に自分たちが罪を背負って暮らしていると感じていました。そしていつの日にかわれわれがそのことを知るのではないかと恐れながら。……

私が軍隊に入った本当の理由のひとつは（3つか4つありますが）、ひとりで暮らせるからです。母は私に家庭の恐怖を、その異端審問の恐ろしさを植え付けたのです。それでも彼女が私の母であることに、並外れた人間であることにかわりはありません。彼女の意志の力を知っている私は、いかなる女性も母親にすることができず、子供を生み出す役割を果たせないのです。彼女はこのことに気づいているのではないかと思います、しかし知らないことがひとつあります。それは、私の内でたえず続いている内戦状態は、彼女と私の父との性格の不一致から、すなわち彼らふたりがそれぞれの生活と規律から根こぎにされた結果生じた、強さと弱さが混じりあって燃え上がることから生まれたものであるということです。彼らは子供を生むべきではなかったのです。²⁴⁾

この告白が、彼と母との葛藤が最高潮に達した時期から20年以上を経て回想されたものであることは忘れてはならない。しかしそれにしても、なんという冷徹さ、いや、マゾヒスト的ともいえるほど鋭い自己と肉親との分析であろう。これは単なる明晰な知性の産物ではない。たえざる「内なる内戦」を経験してきた者特有の分裂した自己意識が、かさぶたの下から膿がしみでるように、じくじくとにじみだしてきたものである。精神分析的ともいえる鋭い分析のメスは、両親の、とりわけ母の魂を切り分けてその内部を露出させると同時に、返す刀で自らの身をも切りさいなむのである。

3. 裏切る肉体

母と自分を、そしてその関係を分析する際のベシミズム、絶望の深さは、それにしても尋常ではない。全体をおおう罪の観念はとりわけ目を引き、彼があれほどに反抗した母の歪んだキリスト教教育が、皮肉にも彼の精神のいかに深い部分にまで達していたかを証明するかのようである。この手紙で注目すべき第1の点は、母による「愛の強要」である。10歳頃には両親の「罪」を知ったロレンスにとって、この強要はとりわけ耐えがたかった。ロレンス・ジェームズは、「母の『秘密』を知ってしまった彼は、自分に押しつけてくる要求から彼女自身がいかにかげはなれているかを知っ

ていた」²⁵⁾ といっているが、ロレンスが母のこの要求に偽善をかぎとっていたことはまちがいあるまい。

しかしむしろ彼は、母の偽善だけを責めているのではない。むしろ、この「愛の強要」という行為そのものの中に潜むいかにわしさを告発しているのである。これを彼は端的に「不可能な要求」と呼んでいるが、これの含蓄するところは深い。いかに深いかは、彼の同時代人で、姓も同じであるD. H. ロレンスの後期の思想と比較するとき、きわめて明瞭になる。²⁶⁾

D. H. の最晩年（といっても、彼も44歳で没しているのだが）に書かれた中編「死んだ男」は、明らかにキリストを思わせる1度「死んだ」男が、蘇生し、かつて自分が教えた愛の教義を否定し、イシスを守る巫女との肉体的接触を通して真に再生するという話だが、その一節にこうある。

男が触れることのできるものはひとつとしてなかった。誰もが、狂ったように自己のエゴを彼に強要し、彼の内なる本質的な孤独を侵犯したがっていたからである。……男女の別なくすべての者が、自己の内部が空っぽであることに死ぬほどの恐怖を感じて狂気に陥っていた。男はかつての自分の布教を、いかに自分がすべての人間に愛を強要してきたかを振り返った。するとあの嘔吐感がまたよみがえってきた。微妙な形でではあれ、なんらかの要求をしない接触などないのである。²⁷⁾

T. E. の母親の分析との共通性は衝撃的で、ともに人間の深層に潜む謎に触れた人間の言葉である。両者ともに「愛の強要」の非を説いているが、D. H. がその底に人間の内部の空虚さの認識を見るのに対し、T. E. は人間の「罪」の自覚を見ている。彼のいう「罪」("guilt," "sin"の両方を使っている)は、狭義には両親の不倫と駆け落ち、とりわけ母の「性的誘惑」を指すが、同時に、キリスト教の原罪とほとんど同じ意味でも使っている。(前の引用文にあった「誕生という罪のいかばかりかは、生まれた子供にもとどまるのではなからうか?」という言葉思い出されたい。)しかし言葉こそ違え、両者が指し示しているのは同じもの、すなわち人間存在そのものにつきまとうなんらかの欠落感、不完全感、R. D. ラングの言葉を使えば「存在論的不安」であろう。ラングは、「人生の初期の経験から安定感を獲得した人間は、他の人間との関係にも満足を見出す可能性が高い。しかし存在論的に不安定な人間は、自分を満足させるよりはむしろ自己を保護することにとりつかれている」²⁸⁾ と言う。T. E. の母の、そして彼自身の分析に、これ以上の注釈はまたとないだろう。フロイトならば明らかにこの不安感を出生時および幼児期のトラウマの体験に結び付けるだろうが、ここで重要なのは、T. E. が、母のこうした不安感、空虚感を「罪」の産物と見ていることである。そして母と父にこの「罪」を犯させた最大の誘因は性であった。

この時点で、同じ認識の場に立っていたふたりのロレンスはたもとをわかず。D. H. は主人公の「男」を、それまで拒ませていた性的接触という未知の圏内に引き入れることによって真のよみがえりを迎えさせる。一方 T. E. は、当然のことながら、罪の原因たる性を自らの身辺から一掃する。観念としての性の拒否から行為としての性の拒否まではほんの一步である。

彼には性的衝動そのものがなかったという俗説には、以上の考察で実質的に答えているのだが、

もう一度確認しておこう。前節で引用した彼の書簡に注目すべき言葉があった。「ぼくは自分が彼らと同じような人間になったことを呪ってきたからだ。……ぼくは彼らが肉欲にふけることから得る満足を、それを拒否することから手に入れるのだ。」「彼らと同じような人間」というのはやや曖昧な表現だが、文脈から考えて、彼らと同じように「肉欲」を備えた人間と取るのが妥当だろう。実際、彼が書き残したのものには、自らの性的経験を否定する、あるいはこれからもする気はないことを示す言葉は散見されるが、性欲そのものの存在を否定するものは見つからない。いや、これについては同じ手紙の彼の言葉自体が何より明瞭に述べている。すなわち彼は、性の、そして性欲の「拒否」というすぐれて意志的な行為によって、他の人間が性から得る満足を得ると言い切っているのである。²⁹⁾

では、これもよくいわれるように彼は同性愛者であったのか。これを論じるには、彼の人生の大きな転回点と一般に認識されているひとつの重要な事件、すなわち、アラブ反乱中に彼がデラアという町で経験した事件に触れねばならない。しかしこれは、謎の多い彼の人生の中でももっとも議論の集中している事件なので、紙幅の関係上、詳細は割愛せざるをえない。ここでは簡単に、これが彼のマゾヒスト的、同性愛的嗜好を彼に気づかせた最初にして最大の出来事だったという仮説に基づいて論を進めよう。

1917年11月、ロレンスはサーカシア人に変装し、ひとりの仲間と、当時まだトルコ軍の手中にあったデラアの町を偵察するが、捕まり、尋問を受ける。そのとき、トルコ軍の長官から同性愛の相手になるよう強要されるが、これを拒否したためにひどい拷問を受ける。しかし、そのおそるべき鞭打ちの激痛の中で、未知の感覚を経験する。

精神をコントロールするために、私は鞭打ちの回数を数えはじめたが、20を過ぎるころにはそれも分からなくなった。感じるのはただ、ほんやり重たい痛みだけだった。爪をはがされるような痛みなら我慢できると思っていたのだが、その苦痛はおそるべき力で私という全存在に徐々にひびを入れ、その力は波動のように背骨を登って行って、ついには脳髄に達し、そこで激しく碎け散ったのだ。……

私が完全にくたばってしまうと、彼らは満足したようだった。……私は汚い床の上に転がっていた。呆然とし、激しくあえいではいたが、なんともいえず心地よかった。私は、この痛みすべてを知ろうと、抵抗の糸が完全に切れるまでがんばった。私はもはや演技者ではなく、観客だった。自分の身体がのけぞり、悲鳴をあげるのも意に介さないようにした。それでも私は、自分の中を何が通り過ぎていったかを知った、もしくは想像したのだった。

伍長が私を立ち上がらせようと、鋏のついたブーツで私を蹴ったのを覚えている。……同時に覚えているのは、そのとき私が彼にほんやりとほほえんでいたことだ。何か甘みな暖かさ、おそらくは性的な暖かさが私の中に満ちあふれるのを感じたからである。……鞭がもう一度振りおろされた。私はうめき、目の前が真っ暗になったが、その間も私の内部では、生命の核が、引き裂かれた神経をゆっくりと登っていき、この最後の筆舌につくしがたい激痛によって肉体からはじき出されていった。³⁰⁾

ここを無事脱出して味方のもとへ帰った後、この事件を振り返る彼は、次のような謎めいた言葉で章を結んでいる。「あの夜、デラアで、私の完璧性の砦は永久に失われたのである。」³¹⁾

前述したように、この事件は、まったくの作り話だとする評者も多く、しかもそう考える理由もさまざま、実にやっかいである。しかし、たとえそうだとしても、ロレンスは少なくとも何事かをここで表現したかたははずである。前に見たように、彼が生涯女性と性的関係をもたなかったのはまず確実で、その原因についても考察してきた。しかし、いかなる宗教観、倫理観を植え付けられたとしても、またいかに観念としての性と生殖を嫌悪したとしても、それで性欲そのものが消えるわけもなく、ロレンスのように常人をはるかに超えた頑健な肉体をもっていれば、それはなおのことであろう。³²⁾ その欲動はなんらかのはけ口を見つけざるをえない。裏切られた肉体は、常に裏切る肉体に変わるのである。

『罪の意識は、あるいは個人では支えきれなくなるほどにまで膨れ上がるかもしれない』が、これを避ける唯一の方法は、世界を変える力として攻撃性を外部に向けることである。³³⁾ もはや支えきれなくなった「罪」の意識をロレンスは外部に向ける。そのエネルギーは初めのうちは考古学的調査の情熱のうちに解消されていたが、第1次世界大戦という「絶好の」機会を得て、内部に秘められていた攻撃性にはけ口が与えられる。ペンギンの大型版で700頁になんなんとする『叡智の七柱』は、アラブ反乱の史的記述という体裁をとってはいるが、著者自身断っているように、明らかにロレンスの個人史であり、より正確にいうなら、彼のこの内なる攻撃性と格闘の記録であり、「罪」の意識を超克する試みである。いや、もっと端的に、彼の「悪魔祓い」の努力の残滓といった方がいい。実際ここには、彼の驚嘆に値する肉体的、精神的克己の様子がページごとにつづられている。すなわちこれは、彼が「世界を変える力として攻撃性を外部に向け」ようと努めて、ついには失敗した記録なのである。

拒否された攻撃性は内部に向かう。この転回を促した最大のきっかけが、前述のデラア事件であろう。(この観点から見ると、この事件が史実かフィクションかという、現在にいたってもなおかまびすしい議論は副次的な重要性しか帯びなくなる。いや、そういった議論自体がこっけいなものになる。) つまりこのときロレンスは、攻撃の対象が自己の内部にもあることを発見したのである。

後日彼は、彼の晩年の「告解師」ともいべきシャーロット・ショーにこう書きおけている。「あの夜について。……傷つけられるのを恐れて、というよりむしろ、私を狂乱に駆り立てていたあの激痛からほんの5分でもいいから逃れたい一心で、われわれがこの世に生まれてくるときにもってくる唯一の所有物、すなわち肉体の完璧性(純潔)を放棄してしまったのです。それは許しがたいことであり、取り返しがつきません。」³⁴⁾ ここで彼は、『叡智の七柱』よりもはるかに明瞭に、自分がトルコ人の長官の同性愛的要求に屈したことを示唆している。「完璧性(純潔)」と訳したのは"integrity"という語だが、これは『叡智の七柱』の中でのこの事件の記述に使っている言葉と同じである。この言葉は、「罪(guilt, sin)」と並んでロレンスの行動を読み解く重要なキーワードであるが、決して肉体的な「純潔」だけを指しているのではない。たとえば、これもシャーロット・ショー宛の手紙の中で、母に関してこう言っている。「思うに私は、母が私の存在の完結性(integrity)の圏内に入ってくるのが恐かったのでしょうか。しかし彼女はいつも私の城壁をハンマーで打ち壊して侵入

しようとしたのです。実に支配的な人間です。』³⁵⁾ここで彼が "integrity" と呼んでいるのは、彼が自分の中に、あるいはすべての人間の中にあると想定していたなんらかの自己充足性、生まれながらにもっている完全性、他の人間が決して押し入ってはならない領域、彼自身の言葉を使えば「生命の核」であろう。³⁶⁾彼は繰り返し、幼年期からいかに母がこれを侵害してきたかを述べている。これに前述した「罪」の意識がからまって、きわめて錯綜した不安な心理が生まれ、外部への攻撃でもこの不安が取り除けなかった彼は、今やその攻撃性を自己の内へと向け始めるのである。

1968年、ロンドンの『サンデー・タイムズ』のウィークリー・リヴューに衝撃的な記事が載る。³⁷⁾この中でフィリップ・ナイトリーとコリン・シンプソンというふたりの著者は、ロレンスは1924年から死ぬまで、ジョン・ブルースという15歳年下のスコットランド青年に金を払い、定期的に自分を鞭打たせていたと書いたのである。おまけにこれは、ブルース自身が彼らに話を持ちこんできたのだという。この説は、反対者と同時に支持者も見出して今日に至っている。もしこれが真実であれば、少なくともロレンスのマゾヒスト的傾向は実証的裏付けを得たことになり、同性愛説もはるかに現実味を帯びてくる。

私はここでこの説の真偽を論じるつもりはないし、正直いって、世に言われるほどには決定的なことでもないと思う。私がロレンスに見出す意味と意義は、こうした「事実」とはほとんど無縁なところにあり、この「事実」はそれに何ほどのものも付け加えはしない。ではその意義とは何か。それは彼が、人間存在の根幹に巢食う存在論的不安をどのように意識し、認識して、それとどう格闘したかという過程にある。彼のマゾヒスト的、あるいは同性愛的傾向は、もしあるとしても完全に内在的なものであり、こうした史実的裏付けを毫も必要としない性格のものである。だから逆に、かりにこの説がまったくのでっちあげであったとしても、彼の深層心理のマゾヒスト的傾向、つまり自己をあらゆる形で痛めつけることによってこの不安と、その根元である「罪」の意識を悪魔祓いしようとしたという「心理的事実」はいっこうに揺らがないのである。

しかし、いかに痛めつけても肉体はつねによみがえり、反逆する。同じく「ピューリタニズムの暗夜」の中に自己を見出すが、多量のモルヒネ投与によって母を安楽死させるというおそろべき行為と、その底に潜む欲求を作品化、すなわち外在化することによって儀式的「悪魔祓い」を敢行し、これをくぐり抜けたD. H. ロレンスは、ついに「肉を通過して神へ」という突破口を見出す。³⁸⁾これに対して T. E. は、渾身の力をこめて書き上げ、書き直した『叡智の七柱』にも裏切られ、最後の望みを託した軍隊生活での肉体と精神の虐待による「救済」にも裏切られる。戦後7年、植民地省を辞して軍隊に「隠遁」してわずか3年後の1925年には、生ける屍となった彼をわれわれは見る——「人間というのは孤独な存在です（私は特にそうです）……誰も、「愛」と呼ばれているものを水道の蛇口をひねるように自由に出したり止めたりすることはできません。私の中には、何に対しても、愛などまったくありません。かつては私も物（人ではなく）と観念が好きでした。今では好きなものなど皆無です。』³⁹⁾

いや、これを生ける屍とってはあまりに感傷的だろう。彼はすべての努力を否定されたのである。肉体を抑圧され、その結果内部に鬱屈したエネルギーを外部に向けるがこれも否定され、今度は自己の内部に矛先を向けるが、これも幻滅以外のものを生み出さなかった。肉体を、フロイトの

言葉を使えばエロスを復活させんとする試みはことごとく失敗に帰する。

「エロティックな構成要素は、ひとたび昇華されると、以前にはその中に含まれていた破壊的要素全部を拘束しておく力を失う。これらの要素は、攻撃や破壊の形をとって解放されるのである。」このようにして蓄積された昇華のたどる道は、同時に、蓄積された攻撃性と罪の意識が蓄積される道筋でもある。攻撃性は、非性化された不完全な世界を前にして途方にくれた本能の反逆であり、罪の意識は、非性化された不完全な自己に対する同じ本能の反逆なのである。⁴⁰⁾

「非性化」された世界、性を剥奪された世界とは、肉体が否定された世界である。ロレンスは生涯この世界と向き合い、対決し、超克しようとした。しかし幼年期に刻み込まれた「罪」の意識、そしてそれが生み出す接触への恐怖、愛への恐怖はあまりに重く彼にのしかかり、肉体の復活を希求する彼の本能の反逆もこれを振り払うことはできなかった。

死後に『モーリス』を残した E. M. フォスターは、ロレンスが心を許したわずかな人間のひとりであるが、彼への手紙にこう書いている。「ぼくはこれまで1度もそれができなかった、少なくともそう信じている。他の人間に触れたいと思わせるほど強い衝動はまだぼくの中には生まれていない。」⁴¹⁾ 「それ」とは、フォスターが『モーリス』や、この手紙の議論の対象になっている「ドクター・ウーラコット」の中で描き、ロレンスがトルコ人に強要されたという同性愛行為である。こうしてロレンスは、彼が「実質的な」同性愛者であるという現在も議論されている説を一刀のもとに両断する。彼は同性愛者でもなく、また異性愛者でもなかった。彼はいかなる形であれ、肉体の接触に耐えられなかった。そして彼の自意識は、自らの内に巢食うその宿痾を痛いまで知っていたのである。ここに彼の、そして多くの人間の最大の悲劇がある。

4 脱出

すべてを拒否された彼は、ただただ死を願う。軍隊生活という疑似的な死ではもはや満足できなくなる。そして1935年5月13日、彼は絶好の「機会」を得た。住居クラウズ・ヒルから約2キロ離れている郵便局へ、晩年唯一の喜びを見出していたバイクを猛スピードでとばして行く途中、坂の頂上で自転車に乗った2人の少年に突然出会い、衝突するのを避けようとしてバイクもろとも道路の外に投げ出された。頭蓋骨をひどく損傷した彼は、6日後の19日、入院先のボヴィントン陸軍病院で死去する。⁴²⁾ 私はこれを自殺だと言おうとしているのではない。しかし、彼のそれまでの言動を見るかぎり、彼が死の欲求、フロイトのいう「タナトス」にとりつかれていたことは否定のしようがない。たとえこの事故がおこらず、かりに晩年を「平穩に」送ったとしても、この心理的事実に変化はないだろう。

ほとんど詩は書かなかったロレンスだが、ここに2編の重要な詩が残っている。ひとつは『叡智の七柱』の巻頭に掲げられている謎の「S. A.」に捧げられた詩、いまひとつは晩年友人のカーロウ卿に贈ったといわれるものである。前者の中にはこうある。「死はこの道を行く私の従者のようであっ

た……」後者は、絶望の中で最後に見出した恍惚、すなわちスピードに対する賛辞である。

スピードの中で、われらは肉体を超越する。

ガソリンの香煙につつまれてのみ、われらの肉体は天空を駆けりゆくことができるのだ。

骨。血。肉。すべてが一体となって内面化される。⁴³⁾

そう、彼は肉体を「超越」せねばならなかった。裏切られた肉体は常に牙をむきだして反逆し、裏切る肉体へと転じるからである。高速の轟音の中で、肉体とともに、接触も、愛も、すべてを断ち切ってしまうねばならなかった。絶望の中で彼にそれを許した唯一のものは、ひとりで乗るバイクであった。

しかし、上に引いたフォースター宛の手紙のこれに続く箇所で彼がもらしている言葉はこうである。「でも、もしかしたら、君の『死』（「ドクター・ウーラコット」の擬人化された登場人物）のような存在に身を捧げることによって、いかなる孤独を通してでも届きえないような、肉体の大いなる認識に——と同時に最終的な破壊へと——いたることができるのかもしれない。」

希望と絶望の交錯——謎めいた言葉を身にまとって、伝説の中でも、ロレンスは仮面を取ることを断固として拒んでいるかのようである。「大いなる認識」と「破壊」、ロレンスがどちらの言葉に賭けていたのかは永久に謎として残るだろうが、少なくとも言えることは、ロレンスがそのあふれかえる能力を清教徒的に開花させ、生が彼に課した運命をすべて引き受けたということである。「死の本能は、抑圧されることのない、すなわち人間の肉体に『生きられることのない運命』を残さない生においてのみ、生の本能と和解する。そのとき死の本能は、喜んで死を受け入れる準備のできている肉体の中で肯定されるのである。」⁴⁴⁾

自らの運命を完遂したロレンスは、かくして死の本能を生の本能と和解させた。もって瞑すべしである。

注

- 1) たとえばスレイマン・ムーサ、『アラブが見たアラビアのロレンス』、牟田口、定森訳（リポート、1991年）、455～539頁を参照。
- 2) 彼は一家がオクスフォード移住後に生まれた年の離れた弟で、後にケンブリッジ大学の考古学の教授になるが、終生兄の T. E. を敬愛し、その劇的な死の後、*T. E. Lawrence By His Friends* という回想録集と彼の書簡集を編纂し、「T. E. ロレンス学」とでもいうべきものの基礎を築くことになる。
- 3) 彼は家族や親友からずっとこのニックネームで呼ばれていた。
- 4) *T. E. Lawrence By His Friends*, ed., A.W. Lawrence [London: Jonathan Cape, 1937], p. 37.
- 5) Vyvyan Richards, *T. E. Lawrence* (Tokyo: Kenkyusha, 1984), p. 1.
- 6) P. ナイトリイ、C. シンプスン、『アラビアのロレンスの秘密』、村松仙太郎訳、（早川書房、1991年）、43頁。

- 7) 1908年当時のオスマン帝国の総人口は約2200万人。そのうちトルコ人は750万、アラブ人が1050万、残りの400万がギリシア人、アルバニア人、アルメニア人、クルド人などであった。(『アラビアのロレンスの秘密』、115頁)
- 8) *T. E. Lawrence: The Selected Letters*, ed. , Malcolm Brown, [New York: W. W. Norton, 1989], P. 233, to Lionel Curtis、1923年3月27日付。傍点引用者。
- 9) ロレンスは当時、英国陸軍の戦車基地、ドーセット州のボヴィントン・キャンプに配属されていた。
- 10) *Selected Letters*, P. 236, to Lionel Curtis, 1923年5月14日付。傍点引用者。
- 11) *Ibid.* , P. 268, to Charlotte Shaw, 1924年6月10日付。
- 12) *Ibid.* , P. 389, to Robert Graves, 1928年11月6日付。
- 13) *T. E. Lawrence By His Friends*, P. 29.
- 14) この事件は、友人の回想によると「遊び半分のとっくみあい」から起こったのだという。(*T. E. Lawrence By His Friends*, P. 46) ナイトリーとシンプソンは、彼に発育障害があったとしても、それは「青年期になってから患った耳下腺炎の結果と考えたほうがよさそうである」(『アラビアのロレンスの秘密』31頁) と述べている。
- 15) *T. E. Lawrence By His Friends*, P. 27.
- 16) Vyvyan Richards, P. 8.
- 17) 制度としての教会の権威よりもはるかに聖書、特に新約聖書の権威を重視し個人の罪の自覚を強調、キリストの贖罪を信じることによるのみ個人の救済は得られると考える、プロテスタント教会の一派。18世紀から19世紀にかけて大きな勢力をふるう。
- 18) Lawrence James, *The Golden Warrior: The Life and Legend of Lawrence of Arabia* [New York: Paragon House, 1993], P. 10.
- 19) 処女懐胎、神の一人子キリストの受難による人間の贖罪、その復活と再臨など、聖書の記述を文字通りの出来事と解釈するプロテスタント運動の一派。
- 20) Jeremy Wilson, *Lawrence of Arabia: The Authorized Biography of T. E. Lawrence* [New York: Collier Books, 1992], P. 7.
- 21) *Ibid.*
- 22) Lawrence James, P. 16, 『アラビアのロレンスの秘密』、35頁。
- 23) Jeremy Wilson, PP. 12 - 13, 『アラビアのロレンスの秘密』、36～7頁。
- 24) *Selected Letters*, PP. 325 - 26, to Chalotte Shaw, 1927年4月14日付、傍点引用者。
- 25) Lawrence James, P. 18.
- 26) ほぼ完全な同時代人であるふたりのロレンスの間には、瞳目すべき類似姓と相違が見られ、有益な比較研究になると思われるが、これも後日を期したい。
- 27) *D. H. Lawrence, Love Among the Haystacks and Other Stories* [Harmondsworth: Penguin Books, 1974], P. 146. 傍点引用者。
- 28) R. D. Laing, *The Divided Self* [Harmondsworth: Penguin Books, 1969], P. 42.

- 29) 上記の別の引用文中の、「私はそういう感情に押し流されたことは1度としてありません」という言葉は、彼の中の性欲の存在の否定のようにも聞こえるが、これもやはり彼の意志の力が言わせているものと取りたい。
- 30) T. E. Lawrence, *Seven Pillars of Wisdom* [London: Penguin Books, 1962], pp. 453~54.
- 31) *Ibid.*, p. 456.
- 32) アラブ反乱中に彼が、酷暑と酷寒の砂漠の中、きわめてとぼしい食料と水だけで行った多くの行軍で示した忍耐力と頑健さは、砂漠の民をも凌ぐものであったという。また彼が食物や睡眠の欠乏にきわめて強かったという逸話は数多く残っている。
- 33) Norman O. Brown, *Life Against Death: The Psychoanalytical Meaning of History* (London: Routledge & Kegan Paul, 1959), p. 153.
- 34) *Selected Letters*, pp. 261 - 62, to Charlotte Shaw, 1924年3月26日付。
- 35) Jeffrey Meyers, *Wounded Spirit: A Study of "Seven Pillars of Wisdom"* [London: Martin Brian & O'keefe, 1973], p. 118. これはマルコム・ブラウン編の*Selected Letteres*には入っていない。
- 36) 興味深いことにD・H・ロレンスもこのような存在を人間の内に見出し、これを「核」と呼んでいるが、しかし彼は"core"ではなく"quick"を使う。
- 37) これをもとにしたのが、同じ著者による大部な伝記、*The Secret Lives of Lawrence of Arabia* (『アラビアのロレンスの秘密』)である。
- 38) Masashi Asai, *Fullness of Being: A Study of D. H. Lawrence* [Tokyo: Liber Press, 1992], pp. 77~100 参照。
- 39) *Selected Letters*, p. 298, to his mother, 1925年12月28日付。
- 40) *Life Against Death*, p. 174. 傍点引用者。
- 41) *Selected Letters*, p. 360, 1927年12月21日付。
- 42) 死後にもロレンスは伝説につきまわれ、この事故に関しても諸説がある。
- 43) 『アラビアのロレンスの秘密』、457頁。わずかに変更。この詩は、すでに自決を決意していた三島由紀夫が、自衛隊に体験入隊した際にジェット機に乗った体験を詩にしたものに、言葉だけでなく、精神においても稀に見る親近性を示している。
- 44) *Life Against Death*, p. 308.